

Rorschach Responses on the Retarded Children : comparison with the normal children

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/20620

精神薄弱児のロールシャッハ反応

—— 普通児との比較 ——

多 田 建 治

問 題

精神薄弱児（以下精薄児と略する）を対象とした、ロールシャッハテストの研究は数多くある。Rorschach H. は、“精神診断学”の中で、即ち、12人の精神薄弱の患者について、テストを施行し、その結果、精神薄弱のロールシャッハテストでの諸特徴を記述している。その特徴として、F+％の低いこと、多くのC、Mの欠如、DWの多いこと、Wの少ないこと、緩慢な継起型、反応内容の少ないこと、A％の高いこと、O-％の高いこと、等があげられている。このRorschachの結果は、被験者の数が少ないこと、被験者が病院収容の患者であること、CA（生活年齢）や、MA（精神年齢）が明らかでないこと、病因が明らかでないこと、等種々の不備があるが、これらの特徴のいくつかは、今日でも、精薄児を観察していると当てはまるものである。精薄児は、状況の現実性（reality）に合った、概念的な思考が出来ないで、単なる印象だけで反応したり、具体的に反応したりする。Rorschachの結果は、これらの特徴を表わしている。それは、プロットの領域に合わない、F-反応の多いことや、外界の刺激に対し概念的に反応出来ない、即ち、FCよりも、Cを多く与える等である。又、精薄児は、対人関係に於て、情緒的に表面的であり、制限されていて、ステレオタイプであり、個人的な感情や態度を表わさないものであるが、Rorschachの結果では、やはり、これらの特徴がみられ、内面性の主観的な、個性の表われであるMの欠如や、反応内容の範囲CRの少ないことや、A％の高

いこと等で示されている。しかし、精薄児の行動の型は多様であるので、これらの結果を一般化するわけにはいかないと Sarason は述べている。

その後、Pfisterは、59人の精神薄弱に対して、ロールシャッハテストを施行した結果、F+％の低いこと、Wの少ないこと、A％の高いこと等は、Rorschachの結果と一致したが、幾人かの被験者はM反応をし、色彩反応の数は少ない傾向があり、Do反応（精神薄弱型小部分反応）は必ずしも全ての精神薄弱に特徴的でないこと、そして、濃淡反応がみられる等がわかった。しかし、Pfisterの研究も、病因が明らかでなく、診断の基準が記述されていないこと、CAやMAが明らかでないこと、一般化するには被験者の数が少ないこと、等、精神薄弱のNormativeなdataとみるには、少し問題がある。

Beckの研究は、もう少し進歩していて、69人の施設収容者に知能テストを行い、被験者をMA段階別に分け、ロールシャッハテストの結果を整理した。その結果、知能のレベルの指標としては、Wの数、F+％、Mの数、A％、O％が考えられた。又、全体としてみると、WはRorschachやPfisterの結果より多く、F+％は平均57.76、A％は平均55.4、O％は平均35.84、Mは26％のものに1ヶ、19％のものに2ヶ以上みられた。

Sloanは、Rorschach、Beck、自己の研究の結果をまとめて、精神薄弱のロールシャッハテストのAccepted Normとして、W=0～5、M=0～1、SumC=0～3、F+％=55～75、

A%=50~70, Z=5~18, P=3~6, F%=80~100, App=D, Dd, R=15~25, をとりあげた。そして, IQ, 80~101のI群24人と, IQ 44~79のII群26人の2つの群にわたる被験者の, このAccepted Normからの逸脱の数を調べた。その結果, 両群の間に差はなく, A%, F%, F+%, Z, Rの5つのサインで, 最も逸脱した者が多かった。それ故, これら5つのサインの如何によって精神薄弱でないと疑ってもよいと述べている。

高橋は, 精神薄弱のロールシャッハ反応の特徴として, 1. 不良な全体反応の多いこと, 2. 時にDdが多い, 3. 弛緩型の継起, 4. F+%が低いこと, 5. 遅鈍型の精神薄弱では決定因子が殆んどFであること, 6. 興奮型や情緒不安型の精神薄弱では, SumCが高く, CFやCが多いこと, 7. 濃淡反応は殆んどみられず, MはⅢ図のMが唯一のMであることが多いこと, 8. A%が高いこと, 反応内容の範囲の少ないこと, 9. 平凡反応が少なく, 精神薄弱の程度のはげしい者では, 0-が多い, 等をあげている。

又, 長坂は, 仮説的精神薄弱標識として, 次のような項目をあげている。1. 反応拒否には意識的拒否と, 知覚不統合のための拒否がある, 2. 知覚不統合の為に全くでたらめに単語を発する, 3. 自由連想的反応, 4. くり返し, 5. 一つの反応を部分的に説明するもの, 6. 不完全な知覚統合, ないし不完全な表現に関するDW反応等, 7. 変化を欠く同一反応傾向, 8. 自己中心的反応, 9. Cnの存在, Mの欠如, FCの欠如, F-%, A%の高いこと, 肯定的表現形式。

精神薄弱を対象とした, ロールシャッハテストの研究は多くある中で, 普通児と直接比較した研究は意外と少ないものであるが, その一つとして, 伊東は, 16名の精神遅滞児と, MA・CAを各々等しくした, 2つの統制群をつくり, 3群について施行したロールシャッハテストの結果を, 自我機能の観点から分析している。そ

の結果は, M, FM, m, 色彩として使用されたFc, FK, FC:CF+C, R, Rejection等が精神遅滞児群に於て, 他の2群と有意に差がみられた。そして, 遅滞児群は, 現実吟味に於ては, それほど劣らないが, 情緒の統合性及び, それと微妙に関係する, 自己実現で劣り, 遅滞児の自我が, 普通児に比べて弱いことはいないが, 遅滞児, 即ち, 情緒的に不安定であるとはいえないと述べている。

この研究は, 養護学校に在学する精薄児に対して施行した, ロールシャッハテストの結果を筆者が以前に行った, 普通児(優秀児ではない)の結果と, 形式分析(量的分析)により比較することにより, ロールシャッハテストの各サインが, 両群で, 量的にどれほど異っているかを明らかにすると同時に, 過去の精神薄弱のNormative Dataについて検討を加えることを目的とするものである。又, 両群のデータを, 内容分析により比較することにより, 両群の, 生活経験のちがいや, それに由来する, 心的内容の差異を明らかにしたいと思う。

方 法

(1) 被験者: 精薄児群は, 石川県下, K養護学校, 中等部, 高等部生徒, CA, 12才~17才台のもの, 42名のうち, 反応数, 5以下の者, 11名を除外した, 31名を分析の対象とした。IQの範囲は37~89, 平均59.81。

普通児群は, 京都府下, O高等学校, 及び, 兵庫県下, H高等学校, H中学校生徒, CA, 13才~16才台のもの, 64名を分析の対象とした。IQの範囲は90~119, 平均106.16。

(2) テスト実施期日は, 精薄児群は, 昭和50年2月19日~昭和51年4月28日まで, 普通児群は, 昭和43年7月16日~同年11月16日まで。

(3) ロールシャッハテストは, 全て個人法で行った。結果の整理は, スコアリングは, 一応クロッパ法を基にし, 整理の為の各項目に於ては, 片口, 高橋から引用したものもある。又, 集計に際しては, 付加記号は, 全て, 0.5と評価

し、出現率を求めたものは、0.5の数値でも1人分とみなした。

shading %は、濃淡を用いている反応数を、全反応数Rで割ったものである。戦い、攻撃反応は、反応内容が、けんか、武器、血、爆発などや、かみつく、おそいかかる、皮をはぐ、火を吐く、怒っている、キバをむき出す、等の攻撃の内容をもった反応であり、不快反応は、死人、ユーレイ、人玉、ガイコツ、悪魔、蛇、トカゲ、ムカデ、バイキン等や、不気味である、ふみつぶされてぐにゃぐにゃである、血が出ている、等の不快な内容をもった反応である。そして、Repetitionは、同一内容の反応が、くりかえして出現した時に、各、1ヶと数えたものである。

結果と考察

I 形式分析

普通児群、64名と、精薄児群、31名の、ロールシャッハテストの結果を、整理、集計したものは、Table 1 に示してある。平均値のものはt-検定、出現率のものは、 χ^2 -検定をして、統計的有意差があるかどうかを調べた。

Table 1 より、反応数Rは、精薄児群の方が1%レベルで有意に少なく、かつ、Rが20未満の者の比率が有意に多い。Rの少なさは、必ずしも精神薄弱のロールシャッハテストでの特徴的サインではないが、普通児群よりも少ないRの結果は、他の研究の結果と一致する。

Wの少ないことは、精神薄弱の一つの特徴的サインであるが、W%は、両群の間に有意な差はみられない。しかし、Wの質を考慮すると、普通児群に多くみられる、統合した良形態のWは、精薄児群には少なく、被験者がインク像を分化しえず、直ちに全体としてみる単純で平凡なWが精薄児群に多い。平凡なWの多い精薄児群は、高度な知的統合力を示すのではなく、常識的な総合的な見方や、見通しの能力を示していると思え、又、これらの精薄児達は、知的な成就への欲求が強いといえると思う。

W-%は、精薄児群に有意に多く、精薄児の独断的で表面的な思考を表わしている。このことは、他の研究の結果と一致する。

Dd%の多いことは、高橋では、精神薄弱の特徴の一つとしてあげているが、Dd%は両群の間に差はない。Dd%は、両群共に10%を少し越え、少し多い傾向があるが、この場合、Dを犠牲にしているので、経験の実際的なことに関心がうすく、過度に知的な接近をしようとしていることを示している。これは、被験者が、両群共、中高校生であり、学業等、知的な欲求が強い年齢群であることも関係していると思われる。

d%とS%は、精薄児群の方が有意に多いがdが多いのは、精薄児が、正確さ、確実さへの欲求や、生活の些細なことへのこだわりを示す傾向があると思えるし、Sが多いのは、精薄児では、知的な対抗的傾向が強く、自己を認めさせようとする傾向が強いことを示している。しかし、このことは、全ての精薄児がそうなのではなく、こうした傾向をもつ精薄児が普通児に比べてより多いと言えるにすぎない。

Mは、精薄児群の方が、圧倒的に少なく、特に、Mが3以上の者が普通児群には多いのに対し、精薄児群では、M=0の者が非常に多い。又、FMもmも、0.1%以下の有意な差をもって少なく、運動反応は、精薄児群では、普通児群に比べて非常に少ないと言える。Mは、自己の欲求や空想などの内的資質を、現実に合わせてうまく処理する統合能力や、想像力、創造性、共感性、自己概念の存在などをあらわす、高度な自我機能のサインである。そして、FMは、衝動の認知、mは、自我が制御出来ない力の認知を示すものである。これらの内的な資質を表わすサインに欠けるのは、精薄児のパーソナリティーが、結局、内省の欠如した、自分というものをもたない、ステレオタイプで、外的な刺激に振りまわされ易い、皮相的なパーソナリティーであることを示している。

形態反応F%平均は、精薄児群が、0.1%レベルで有意に高く、又、普通児群では、40~59%

の正常範囲内の者が多いのに対し、精薄児群では、60%以上の高いF%を示す者が圧倒的に多い。形態反応は、想像力や創造力をあまり働かさずに、現実を客観的に認識するものであり、個性の少ない紋切型の特性を示すものとされている。80%を越えるような高いF%は、知的機能が十分に分化していなくて、人格組織の統合が貧困であり、現実の構造の外廊にしか反応出来ない。そして、自分の欲求を十分に認知出来ず、自己の周りの情緒的な環境のニュアンスを感知出来ないこと、即ち、「自然的収縮性」を表わしている。精神薄弱では、こうしたF%の高さは出現し易いとされている。

又、F+%は、精薄児群の方が有意に低く、特に、F+%が70%以下の者が精薄児群に有意に多い。それと符号して、F-%平均は、精薄児群の方が有意に高く、そして、F-の出現率では両群に差はないが、10%以上のF-%を示す者の割合は、精薄児群に有意に多い。即ち、普通児群では、F-は出現しても、せいぜい、1つとか2つの少数でしかないが、精薄児群では、多くのF-が同一個人に出現する。F+%は、自我の強さ、即ち、自分の注意を意志によって統制し、現実を正確に把握する能力を表わすものであり、高いF+%の人は、通常的狀況下では、自己統制力が強く、よく判断してから行動し、衝動的になることはない。そして、低いF+%の人は、行動がでたらめで、一貫性がなく、予測出来ない行動をとる人であるといえる。又、F-は、被験者のもつ欲求が強く、それを抑制する力が弱い時に生じるものであり、現実への無関心や現実の曲解、無視をあらわし、F-の数が多いのは、思考過程が異常で、情意が混乱している。精薄児群に於て、こうした、F+%の低さや、F-の多いことは、他の研究の結果でも一致してみられている。

濃淡反応は、一般に、精神薄弱では少ないものとされている。特に、FKやFcは、精薄児では出現し難いとされている。FKは、普通児群では、36%の者にみられているのに対し、精薄

児群では、わずか6%の者にしかみられていない。Fcは、普通児群では、63%の者にみられているのに対し、精薄児群では32%の者にみられている。FKもFcも、平均、及び、出現率に於て有意差がある。又、KF、Kや、cF、cも、精薄児群の方が有意に少ない。インク像を、立体的に奥行きをもってみるような、高度の知覚様式で出現するFKは、自分から問題を切り離し、より冷静にみる、自己を判断する成熟度を示すものであり、自己評価力や、内省力に乏しい精薄児に於て、みられ難いのは当然だと思える。愛情欲求の認知と受容を示すFcは、これらの精薄児群に於ては、約半の者にみられている。それは、これらの精薄児達の基本的人間関係である、家族環境などが、他の精薄児達と異なっていて、かなり好ましいものかもしれないし、又、集団の一員として、受容され、承認された基本的な安全感をもっている精薄児が多いといえるかもしれない。一方、KF、Kや、cF、cは、精薄児群では出現率が非常に少ないが、これは、愛情欲求の不満による不安を、認めなくて済ますような防衛機制が発達しているとみてもよいだろう。

色彩反応FCは、精薄児には殆んど出現しないとされているように、FCのみられた者は、精薄児群では、13%にすぎない。FCの平均も出現率も、精薄児群が有意に少なく、F/C、F↔Cなどのサインも、普通児群では、19%の者にみられているのに、精薄児群では、殆んど出現していない。又、CFの平均、出現率、C/F、C↔Fの出現率も、精薄児群の方が有意に少ない。精神薄弱の特徴的サインの一つとされているCの出現率は、他の研究と異なり、当精薄児群では非常に低い。これらの結果から当然のことながら、SumCは、普通児群では3以上の者が多いのに対して、精薄児群では1以下の者が殆んどである。

FCは、形態と色彩との統合に成功したことを示すものであり、情緒刺激に対する反応性を失わない、整った制御を示すものである。現実

Table 1 ロールシャッハテストの各サインについて普通児群と精薄児群の比較

	普通児群	精薄児群	t	χ^2	P
人 数	64	31			
男 : 女	36 : 28	20 : 11			
I Q 平 均	106.16	59.81	20.311		P < .001
" 分 散	7.66	14.32			
R 平 均	24.00	17.05	3.275		P < .01
R < 20 出現率	41%	68%		6.143	P < .05
W % 平 均	59.67	56.10	0.734		
W% = (80~100) 出現率	19%	23%		0.192	
" (50~79) "	48%	39%		0.798	
" (30~49) "	25%	23%		0.067	
" (0~29) "	8%	16%		1.534	
W - % 平 均	2.65	9.71	4.083		P < .001
W - ≥ 1 出現率	41%	58%		2.555	
D % 平 均	27.77	31.32	0.883		
d % 平 均	0.73	2.68	2.626		P < .05
Dd % 平 均	10.44	10.07	0.186		
Dd% ≥ 10 出現率	52%	52%		0.000	
S % 平 均	1.38	3.13	2.767		P < .01
L R 平 均	3.14	3.27	0.743		
M 平 均	3.08	0.52	5.606		P < .001
M ≥ 3 出現率	41%	3%		14.359	P < .001
3 > M ≥ 1 出現率	41%	19%		4.230	P < .05
1 (= P) $\geq M \geq 0$ 出現率	19%	77%		30.545	P < .001
M = 0	5%	68%		42.513	P < .001
F M 平 均	4.50	0.97	6.137		P < .001
m 平 均	2.02	0.40	3.616		P < .001
K · K F 平均	0.44	0.18	1.851		
K · K F 出現率	41%	13%		7.428	P < .01
F K 平 均	0.45	0.03	2.567		P < .05
F K 出現率	36%	6%		9.364	P < .01
F % 平 均	50.25	79.26	8.814		P < .001
F% = (80~100) 出現率	2%	48%		32.694	P < .001
" (60~79) "	23%	42%		3.438	
" (40~59) "	50%	10%		14.593	P < .001
" (0~40) "	25%	0%		9.320	P < .01
F + % 平 均	89.88	82.74	2.505		P < .05
F + % ≤ 70 出現率	3%	26%		11.407	P < .001
F - % 平 均	3.14	13.07	4.626		P < .001
F - % ≥ 1 出現率	44%	55%		1.030	
F - % ≥ 10 出現率	9%	48%		18.459	P < .001
Fc 平 均	1.41	0.57	2.878		P < .01
Fc 出 現 率	63%	32%		7.661	P < .01
cF, c 平 均	0.39	0.03	3.017		P < .01
cF, c 出 現 率	38%	3%		12.652	P < .001
C' 平 均	0.59	0.27	1.788		
C' 出 現 率	45%	23%		4.585	P < .05
FC 平 均	0.81	0.19	3.216		P < .01
FC = 0 出現率	42%	87%		17.170	P < .001
F / C F $\leftrightarrow$ C 出現率	19%	3%		4.261	P < .05
C F 平 均	1.66	0.60	2.893		P < .01
C F = 0 出現率	27%	55%		7.266	P < .01
C / F C $\leftrightarrow$ F 出現率	13%	0%		4.231	P < .05
C 出 現 率	13%	6%		0.811	

Table 1 ロールシャッハテストの各サインについて普通児群と精薄児群の比較

	普通児群	精薄児群	t	χ^2	P
SumC ≥ 3 出現率	34%	3%		11.043	P < .001
3 > Sum > 1 "	30%	16%		2.033	
1 $\geq$ Sum C "	36%	81%		16.699	P < .001
D R 平均	7.04	3.45	8.400		P < .001
FK + Fc < $\frac{1}{4}$ F 出現率	70%	90%		4.699	P < .05
FK + F + Fc % ≥ 75 出現率	5%	65%		40.740	P < .001
未分化濃淡 > 分化濃淡 出現率	22%	13%		1.095	
Fc + c + C' > 2(Fc + CF + C)	11%	13%		0.079	
FC $\geq$ CF + C $\neq 0$ 出現率	25%	3%		6.739	P < .01
FC > CF + C = 0 "	9%	10%		0.002	
FC < CF + C "	50%	32%		2.665	
FC ≤ 0.5 , CF ≤ 0.5 出現率	16%	55%		15.786	P < .001
$\frac{VII+IX+X}{R} \pm X$ % 平均	34.31	36.65	1.192		
$\frac{VII+IX+X}{R} \pm X$ % > 40 出現率	22%	39%		2.978	
40 $\geq \frac{VII+IX+X}{R} \pm X$ % ≥ 30 出現率	56%	39%		2.570	
30 > $\frac{VII+IX+X}{R} \pm X$ % 出現率	22%	23%		0.006	
体験型内向型出現率	37%	6%		9.742	P < .01
" 外向型 "	18%	19%		0.027	
" 両向型 "	27%	0%		10.029	P < .01
" 両貧型 "	19%	74%		27.590	P < .001
Shading % 平均	14.69	5.42	4.922		P < .001
濃淡ショック出現率	13%	16%		0.233	
色彩ショック出現率	23%	15%		0.865	
P 平均	4.41	2.66	4.986		P < .001
O % 平均	7.06	13.26	2.986		P < .01
O - % 平均	0.61	8.81	5.641		P < .001
O - 出現率	9%	48%		18.459	P < .001
C R 平均	6.64	4.57	3.954		P < .001
H % 平均	19.53	10.39	3.789		P < .001
A % 平均	49.11	62.29	3.771		P < .001
A % = (70~100) 出現率	8%	39%		13.569	P < .001
" (50~69) "	42%	32%		0.866	
" (0~49) "	50%	29%		3.743	
(H) + (A) $\geq \frac{1}{2}$ (H + A) 出現率	34%	23%		1.370	
H + A ≈ 2 (Hd + Ad) "	34%	16%		3.418	
At % 平均	1.95	2.65	0.577		
Pl + Food % 平均	7.59	11.48	1.753		
Geo + Cl % 平均	1.75	1.58	0.211		
Smoke % 平均	0.63	0.16	1.622		
Fire % 平均	2.62	0.84	2.751		P < .01
戦い攻撃反応 % 平均	8.13	5.42	1.405		
" % ≥ 10 出現率	30%	26%		0.155	
不快反応 % 平均	5.98	8.48	1.260		
不快反応 % ≥ 10 出現率	25%	29%		0.175	
Repetition % 平均	7.69	17.97	5.229		P < .001
Repetition % ≥ 20 出現率	2%	35%		21.775	P < .001
平均 T/R _i $\geq 30_{sec}$ 出現率	34%	26%		0.710	
T/R _i (achocch) $\geq 10_{sec}$ "	39%	35%		0.114	
FL 0.5% ≥ 10 出現率	48%	23%		5.818	P < .05
FL - % ≥ 10 出現率	11%	52%		18.831	P < .001
Rejection 平均	0.23	1.19	4.923		P < .001
Rejection 出現率	20%	58%		13.540	P < .001

* LRは Location Range, DRは Determinant Range, CRは Content Range FLは Form Level の略

への合理的、積極的な適応の指標でもあるFCは、形態と色彩という二つの相反するものを統合する資質に欠ける精薄児には、殆んどみられなくて当然であろう。これに対し、CFは、社会場面の現実的要求に対し、やゝ制御を欠いているが適切で純粋な情緒の反応の指標である。情緒的刺激に対して、幼稚な子供っぽい反応を示すCFは、精薄児群でかなりみられているが、普通児群に比較すると有意に少ない。又、情緒の制御が病的に欠如した、爆発性の情緒性の指標であるCは、精神薄弱の特徴的サインの一つであるが、当精薄児群では殆んどみられていない。これは、当精薄児たちが社会場面で、情緒的刺激に対する反応を抑制することを訓練されてきた結果だともとれ、そしてその代りに、情緒的刺激に対する反応性が弱くなり、色彩反応が全般的に少なくなっていると思われる。

努力した情緒的反応度をあらわす、 $F \leftrightarrow C$ や $C \leftrightarrow F$ 、自分の感情と関係のない表面的な仕方係りあおうとする、 F/C 、制御の成功していない表面的な反応を示す、 C/F 等のサインは、普通児群では、時々みられているが、精薄児群では全くみられていない。これは、精薄児に於ける、情緒的刺激に対し、それに気づくことの出来ない反応性の弱さや、対人関係での合理的な防衛機制が出来ないで、一か八かの係り合いしか出来ないことを示していると思う。

決定因の範囲DRは、精薄児群は、普通児群の約半分であり、精薄児群が、図版のもつ様々の要素に気づくことの出来ないこと、即ち、刺激に対する感受性の少なさや、心的構造の硬さのようなものの存在を感じさせる。

次に、精薄児群では、 $M=0$ の者が非常に多いので、 $W:M$ 、 $M:FM$ 、 $M:FM+m$ 等の比率については省略した。

$(FK+Fc)<\frac{1}{4}F$ は、愛情欲求の拒否、抑圧、発達の不十分の指標であるが、精薄児群の方が有意に出現率が高い。普通児群でも出現率がかなり高いのは、被験者が思春期の生徒であることや、筆者の濃淡反応でのスコアリングの厳し

き等が影響しているかもしれない。

$(FK+Fc+F)\% \geq 75$ は、神経症的収縮性の指標であるが、精薄児でこの出現率が高いのは、 $F\%$ が高いからであり、 FK や Fc は少ないので、神経症的収縮性よりも、むしろ、自然的収縮性が精薄児群に於て強いとみてよいと思う。

$FC:C+F$ の比については、普通児群では、25%の者が、 $FC>C+F$ で、情緒の制御が適度に行われる、望ましい情緒の反応性を示しているが、精薄児群では、 FC も、 $C+F$ も、共に少ない型が多く、環境からの情緒的刺激への反応性が少なすぎることを示している。

体験型に関しては、普通児群は、精薄児群よりも、内向型（運動型）と、両向型（等価型）が有意に多く、精薄児群は、両貧型（収縮型）が有意に多い。内向型は、自己の精神的内部の働きを重んじ、空想力が高く、自分自身の考えや価値体系をもっている型であり、両向型は、創造性、主観性ととも、模倣能力や、情緒的に人に訴える能力を兼ねそなえた好ましい型である。これら2つの型が、精薄児群に少なく、精神内容が乏しく、自発性や環境への感受性の欠如した、両貧型が、精薄児群に多いのは、当然の結果ともいえよう。又、自分の感情を外部に表現し、環境からの刺激に敏感に反応する、外拡型（色彩型）は、両群の間に差がなく、興味深いことである。

shading%は、精薄児群が有意に少なく、環境に対する、きめ細やかな感受性に欠けることを示している。

平凡反応Pは、精薄児群が有意に少なく、他の人と共通したものが見方が出来なく、自己中心的であることを示している。

独創反応0%は、精薄児群に有意に多いが、そのうち、0-1%の比率が高いのであって、0-10%の方は両群に差はない。0-1%は、精神の混乱を表わすものであり、精神薄弱では、特徴的サインの1つとされ、多くみられるものであり、他の研究の結果と一致する。

反応内容の範囲CRは、精薄児群が有意に少

なく、生活領域の狭さ、経験の少なさ等を示している。

H%は、精薄児群が有意に少なく、対人的関心の少ないことを示している。

A%の高さは、精神薄弱の特徴的サインの一つであり、そのとおりに、 $A\% > 70$ の者の比率は、普通児群に比べて有意に高い。高いA%は知的活動の不活発さ、常同的な見方、興味の範囲が狭いこと等を表わしている。

その他の内容については、Fire%平均が、精薄児群に有意に少なく、普通児群に多いことである。Fire反応は、抑制し得ない強い感情の存在を示し、児童では、その環境と争っているとする衝動を示すと言われている。そして、これら思春期の普通児の方が、案外、環境から種々の形で圧迫されていると感じているのかもしれない。

Repetitionは、精薄児群に有意に多く、精薄児の固執の強さ、パーソナリティの硬さを示していると思える。

又、形態水準が0.5の反応の割合が、10%を越えるものの比率は、普通児群の方が有意に多い。これは、子供から大人への発達途上にある思春期という不安定な時期の普通児の被験者に於て、mF, CF, C'F, KF, cF等の未分化な反応が多いのは当然のことであり、子供っぽい要素を残しながら、一方で、成熟した反応を増加させていくという状況にあるのであろう。ところが、精薄児群ではこれらの未分化な反応は少ない。これは、F%の高さに示されるような、パーソナリティーの収縮のためであり、精薄児が、MAの等しい、単に、普通児の小さな子供とは、パーソナリティーが質的に異なることを示していると思う。

形態水準マイナスの反応が、10%以上の者は精薄児群が圧倒的に多い。これは、精薄児が、普通児と比べて、知的機能の水準が低いばかりではなく、現実とのつながりが弱まっていて、現実を無視してまで、自己の要求を表現しようとしているといえる。

反応拒否 Rejectionは、精薄児群の方が有意に多いが、拒否には、意識的拒否と、知覚統合不全による拒否とがある。精薄児の場合は、多分に、知覚統合不全による拒否が多いだろうと考えられる。しかし、拒否の一般的な意味づけとしての、抑うつ傾向や、不安の存在、注意散漫や、持久力の欠如なども、拒否の一面として精薄児群に当てはまると思う。

以上、述べて来たように、従来の研究で見出されている、精薄児のロールシャッハテストの諸特徴の大部分は、確証されたと言える。ただ、Wが多いことと、Cが少ないことは、この研究の結果では異っている。

II 内容分析

被験者がインク像に何をみるかの違いは、このテストが投影法テストと称されている様に、このテストから測定可能な最も興味ある事柄である。つまり、投影法テストとは、被験者の、欲求、願望、動機、興味、生活経験の差異が測定出来るところに意義があるものである。反応内容の分析は、個々の事例に当っては、非常に注意深く、独創的なもの、くり返し出現するもの、奇妙な言語化、前後の反応との関係、形態水準、決定因、領域との関係などの観点からなされるべきである。しかし、ここでは、精薄児群という一つのグループをとりあげるのので、普通児群との比較に於てしか内容分析は出来ない。又、出現度数の低い、独創的な反応は、分析しても意味のないことになる。

そこで、Table 2に示した様に、各図版ごとに、A：両群にほぼ同じ様に見られる反応内容、B'：普通児群に多く、精薄児群に少ない反応内容、B：普通児群にのみ見られる反応内容、C'：精薄児群に多く、普通児群に少ない反応内容、C：精薄児群にのみ見られる反応内容、の5つの型に個々の反応を分類して整理した。なお、各型の反応の後に示した（ ）の中の数値は、普通児群対精薄児群の出現度数の比である。又、反応内容のみでなく、反応の型の違いをも取りあげて、精薄児群に特有の反応のし方があるか

どうかを調べてみた。

以下、各図版毎に、両群の反応内容、反応の型の違いをみていく。

○ I 図

Rejectionは、普通児群では1人(2%)しかいないのに、精薄児群では4人(13%)いて精薄児群に、テスト・ショックが多いことを示している。P反応の羽のある動物は、両群ともに多い。W又はWSで動物の顔を見る反応は、普通児群に多く、精薄児群にも少しみられる。普通児群では、狐、狼、熊、牛、猫、犬と種々の動物がみられるが、精薄児群では、狐と狼が大部分である。又、この部分を、普通児群では、鬼や悪魔の顔、仮面にみる反応が多いが、精薄児群では少ない。普通児群でよく見られる、3人の人間が踊っている等のM反応は、精薄児群ではなく、そもそも、人間がみられることは殆んどない。一人だけ、D₁に人間を見ているが、それも形態反応である。又、D₁のカブト虫が普通児群では6人も出現しているのに、精薄児群では欠けている。そして、精薄児群では、全体反応としてカブト虫がみられている。結局、精薄児群は、D₁の部分を、全体から切り離して見ることが出来ないと言っても良いようである。又、花の反応は、精薄児群では、多く出現するのに、I図では欠けている。普通児群では、あやめの花の反応が、3人もいるが、そうした複雑な花を、インク像に合わせて概念化出来るだけの能力に欠けていると思う。精薄児群に特徴的な反応としては、突出部への反応や、d₁を鳥の羽だけとか、d₄をコーモリの顔だけと言った、明らかに全体反応すべきところを一部だけで反応する等がみられる。又、蝶と言って、図版の半分だけを指したりする者もある。I図で、精薄児群に、コーモリや、狐、狼等の内容が、比較的多くみられ易いのは、テスト開始時に於ける、抑うつ性や、敵意、要領の良さのようなものを象徴的に示しているともとれる。

○ II 図

Rejection は、普通児群では1人(2%)だ

が、精薄児群では4人(13%)いる。この図版は、普通児群では、P反応の二匹の動物や、二人の人間が何かをしている結合反応が見られ易いが、精薄児群では、漠然とした全体反応で、インク像を縦に、D₁を頭、D₃を胴体、D₂を足とした一匹の動物をみる傾向が強い。それ故、概念をインク像にこじつけた、F-反応が出現し易い。インク像全体を、動物や人間の顔にみる見方は両群ともに出現する。精薄児群では、人間の全体を見ることが出来なくて、人の顔、悪魔の顔とか、人の首、足といった部分を見る者が4人いる。精薄児群では、蟹の反応が多く、全体を蟹というほか、上部D₂だけを、蟹のハサミと反応する者がいる。これも、明らかに全体反応すべき所を一部のみで反応するし方である。又、普通児群では、赤色部の血の反応が、動物、人間と結合して、「けんかして血が出ている」等となって出現するのに対して、精薄児群では、赤色部だけ、血と反応したりする。普通児群では、人間、動物以外に、地図、建物、ロケット火山や溶岩、景色、肺等が多くみられるが、精薄児群では、殆んどが動物であり、普通児群では少ない植物反応が少し見られる。II図で、精薄児群で多く出現する蟹、時に赤色部ハサミの強調は、精薄児群に於て、対人関係での愛情欲求が拒否されないかという不安からの防衛が強く、潜在的な敵意や怨恨を示しているようである。

○ III 図

Rejection は、普通児群ではないが、精薄児群では、4人(13%)みられる。普通児群では、P反応の、両側に二人の人がいて何かをしているという結合反応が多く出現するが、精薄児群では出現度数は少なく、人間にみるところを、ガイコツ、犬、鳥、トンボ等をみる傾向がある。又、普通児群ではD₈でみるところの、ガイコツ、犬をD₈でみたり、明らかに全体でみてもよいところを一部D₈だけで反応したりする。又、一つのまとまった領域、D₂やD₉の一部を切りとって反応したりする。これらの反応のし方は、精

薄児が領域の指示に於て、おどおどした態度で、出来るだけ領域を縮小しようとする傾向さえ伺えるものである。精薄児群では、インク像全体を一匹の動物や動物の顔をみる反応が他の図版と同様に多い。そして、普通児群でみられる、P反応のリボン、蝶ネクタイは全くみられないし、D₂の人玉や、全体を花瓶とみる反応も殆んどみられない。Ⅲ図で普通児群にみられなくて、精薄児群にみられる内容は、トンボぐらいである。

○Ⅳ図

Ⅲ図までの図版より、インク像を概念化するのに困難度の高い図版であるが、精薄児群ではRejectionは、3人(10%)であり、むしろ少なくなっている。普通児群では、全体で、怪獣、大男、大木等をみる反応が多いが、精薄児群でも多少みられる。インク像全体を縦に、頭から尾へと、一匹の動物や、動物の毛皮をみる反応は、むしろ、精薄児群に比率が高い。精薄児群では、コーモリや蟹や鳥など、Wでみるところを、いいかげんな切り方をしてdrでみたりする。これは、反応が漠然としていて、質疑にうまく答えられない為である。又、明らかに全体としてみるべき所を、d₁やd₂でみる反応もみられる。普通児でみられる立体的な見方、即ち、前から見た動物、坐っている動物、重なり合った動物どうし、密林の中の小屋などの通景反応などは、精薄児群では見ることが出来ない。これは、能力の欠如によるものと思う。又、雲、洞窟、岩、原爆、噴火、噴水などの、mF、CF、KF、cF反応もみられていない。Ⅳ図で、普通児群にみられなくて、精薄児群にみられる内容は、カブト虫である。

○Ⅴ図

10枚の図版のうち、最も見やすい図版だけに両群ともにRejectionはない。P反応の羽のある動物は両群ともに多い。精薄児群では、このP反応が9割以上の大部分を占めている。普通児群では、全体で一人の人間や、D₁に人間をみたり、全体を複数の動物や人間の組み合わせで

みる、MやFM反応がかなりみられるが、精薄児群では全くない。d₁やd₂やd₃を、鰐の口などと反応することも精薄児群ではない。たゞ、上方突出部d₃に反応したものは3人いる。普通児群でみられる、サングラス、ヘアーバンド、ハイヒール、カップ等の反応もみられない。

○Ⅵ図

困難度の高い図版故、Rejectionは、普通児群でも、3人(5%)、精薄児群では7人(23%)もいる。P反応の、動物の毛皮や、全体を毛皮のある一匹の動物とみる反応は、普通児群と同じくらいみられる。しかし、精薄児群では、漠然と反応をし、動物の概念をインク像にこじつけるので、F-反応になり易い、D₂の動物の顔や、全体で、木や花をみるのも、普通児群と同じくらいに見られる。精薄児群では、突出部や細部の反応が目立つ。又、典型的なDW反応が1人みられた。普通児群では、動物以外の内容、ギター、ビワ、シャミセン等の弦楽器、ピストル、花瓶、うちわ等の事物、船、飛行機などの乗り物、魚、岩の上の燈台、家が水に映っている等の結合した景色、爆発、噴火、噴水等のmF、CF反応が多くみられ、反応内容が多種多様であるのに対し、精薄児群では、極端に異なり、殆んどが、虫を含む動物であり、植物がこれに少し加わった程度である。人間反応もなく、これ以外の内容をもつ反応は2個にすぎない。Ⅵ図では、両群の生活経験の違い、心的内容の違いというものが極端に表われている。Ⅵ図で精薄児群に比較的多くみられるのは、猫とトンボである。

○Ⅶ図

Rejectionは、普通児群では2人(3%)であるが、精薄児群では6人(19%)と多い。普通児群では、二人の人間が何かをしているM反応が多いが、精薄児群では2人にみられたにすぎなく、そのうちの1人は形態反応である。二匹の兎は、普通児群ほど多くはないが、4人にみられている。又、精薄児群では、D₃だけを兎の顔と反応した者が2人いる。これも、明らか

に全体反応すべき所を、部分で反応しているし方である。普通児群では、このD₃を、人間の顔とみる傾向が強い。精薄児群では、全体で漠然と、インク像を縦に一匹の動物（鳥、蟹、魚、カブト虫など）を見るこじつけの見方が特徴的であり、こうした反応は、F-になり易く、普通児群ではみられない。普通児群では、全体を、縦に、一人の太った人間や、動物の後足をみたりする。インク像全体にSを加えた、動物の顔（D₃を角とする）の反応は、普通児群でもみられるが精薄児群の方が多し。又、D₃の上方突出部を、指、角、手などと反応するのが特徴的である。普通児群での、D₂、D₃に人間の顔、D₁に動物の顔をみる反応は、精薄児群にはない。そして、D₂に動物の顔をみる反応は、精薄児群では2人いるのみである。VII図で、人間をみる反応は、精薄児群では少なく、鬼の顔を2人がみているのみである。VII図では、VI図と異なり、精薄児群でも、動物以外の内容、花瓶、胃等の事物、飛行機、雲、入口、山、池、石等の自然がかなり出現している。

○VIII図

Rejectionは、普通児群で、1人（2%）、精薄児群で、2人（7%）と少ない図版である。両側D₁を二匹の動物とみるP反応は、普通児群では殆んどの者にみられているが、精薄児群では、約半数の者にのみ見られている。そして精薄児群では、四つ足の動物の代りに、鳥、セミの幼虫、蛙等をみる反応が出現している。VIII図は、Dの領域が比較的分化していて、とり出し易い図版であるので、普通児群では、Dを結合した全体反応をするのに対し、精薄児群では、結合した反応は少ししかみられない。そして、精薄児群では、どの図版でもみられるような、インク像全体を縦に、漠然とした一匹の動物を見る反応が特徴的である。図版が、Dの各領域に分かれていて、色彩のせいもあり、精薄児群では、この図版で、内臓などの解剖反応が多くみられる。しかし、この解剖反応は普通児群でもみられ易いものである。普通児群では、動物

の内容の他に、飛行機、木、山、船、エッフェル塔、シャンデリア等の電気類、カキ氷などの食物、噴火、噴水、火事、火山等のmF、CF反応が多くみられるのに対し、精薄児群では、殆んどみられないし、みられてもごく少数の者に於てのみである。花と魚、事物は、両群に等しくみられる反応である。雲、虹は、精薄児群に於てのみ、2人みられている。又、普通児群では、D₂やD₂の半分を、人間や動物の顔とみる反応があるが、精薄児群では、D₂への反応はみられない。その代りに、D₇の領域の反応は、精薄児群にのみみられていて、これは、横にみる反応として、精薄児群に特徴的な反応のし方の一つであると思う。又、この図版では、精薄児群に於て、羊、小鳥のような、0+の反応がみられ、VIII図は精薄児群にとって反応し易い図版だと言えそうである。この色彩図版に於て、精薄児群に比較的多く出現する、解剖反応や雲は、精薄児の対人関係に於ける漠然とした不安の存在を示していると思う。

○IX図

IX図は、インク像を適切に知覚し、概念化するのに最も困難な図版で、VI図と共に最も、Rejectionの多い図版とされている。そして、普通児群では、4人（6%）、精薄児群では、7人（23%）の者にRejectionが生じている。普通児群では、火、火事、爆発、噴火、噴水、雲、滝、煙等のmF、CF、KF反応や、山、湖、太陽、波、岩、橋、城、船、等の自然や、通景反応が非常に多くみられる図版である。精薄児群ではこうした反応は非常に少ない。精薄児群では、インク像全体を縦にみる、漠然とした全体反応で一匹の動物をみる反応や、全体を動物の顔とみる反応が多い。D₂をエビ、蟹、龍等の動物にみる反応は、普通児と共通しているが、D₂の上方突出部d₁+d₃を動物の角やヒゲとみる反応は、やはり、動物全体とみるべき所を、部分でみる反応ととれ、精薄児群の特徴的反応の一つと言える。又、横にみる反応として、D₁の緑色部を、左右に一匹の虎とみたり、D₆を左右に

一匹の鳥とみたりする反応様式がみられる。精薄児群に欠けるのは、人間どうし、動物どうしの結合した反応や、D₈のうすい色の部分に注目した反応である。又、色彩図版にもかゝらず、花の反応は少なく、普通児ではみられない木の反応が3人にみられている。

○ X 図

Rejectionは、普通児群ではなく、精薄児群では1人(3%)にみられたのみである。X図は多くのDがばらばらに存在する図版であり、普通児群でも精薄児群でも、各Dの部分で、虫、四つ足の動物、鳥、魚などにみる反応が非常に多い。しかし、これを、虫の集まりや海の中といったような全体をまとめる反応は精薄児群ではみられない。D₁₆を顔の輪郭として、Sを組み合わせて、人間や動物の顔にみる反応は両群共に多い。精薄児群は、普通児群でみられるように、D₉で人間をみることは出来ないし、又、D₁を、馬に乗った人のような、人間+動物、動物どうしの組み合わせの反応も出来ない。又、抽象反応も不可能である。そして、精薄児群では、どの図版でも生じている蟹、蝶など、一匹の動物を、インク像全体に漠然とみる反応がみられるが、X図はバラバラのインク像が多く散らばっているので、きわめて、F-反応になり易い。又、横にみる反応として、インク像を勝手に区切り、円盤や蛍光灯などの独断的な奇妙な反応のし方がみられたりする。又、全体に反応すべき所を一部だけで反応した、D₆を泣いている目、D₃を蛾の尾のような反応もみられる。精薄児群では、花、木、草等の植物、海草などの反応はかなり出現するし、解剖や事物もみられ易い。しかし、D₁₆やD₁₇を岩や崖、谷とみた結合反応や、火、火の玉等のCF反応は少ない。又、多くの動物の種類がみられるが、P反応の、クモ、青虫、兎の顔は精薄児群では少なく、普通児群に多い、バイキン、プランクトン、幼虫といった内容は全くみられない。精薄児群では、カブト虫、サソリ、イソギンチャク、鹿といった内容が、普通児と比較して多くみられる。D₅の鉄

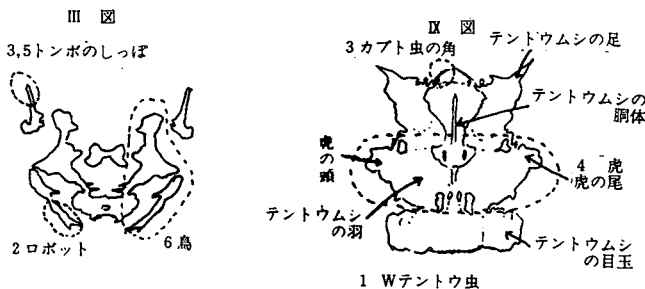
や、飛行機、橋などは、精薄児群にのみ見られた内容である。バイキン、プランクトン、幼虫等の内容は、明らかに、著しく退行した病的傾向を示すものであり、こうした反応は、退行よりも遅滞を示す精薄児群では現われないとみてよいだろう。精薄児群にみられる、サソリや鉄の内容は、攻撃性や、独立への欲求のようなものの象徴的表現だととれる。又、X図で精薄児群にみられた橋は、家族の中で、頼れる人がないと感じる不安全感があり、安全への欲求を象徴的に表現しているともとれる。

以上、各図版ごとに、両群の反応内容の違い、反応のし方の違いをみてきたが、全体的にまとめてみると、精薄児群に特徴的な反応の仕方(Fig 1 参照のこと)として、1.漠然とした全体反応、インク像を縦にみて、頭から尾への一匹の動物をみる。概念をインク像にこじつける為にF-になり易い反応の仕方、2.ふつう全体でみるところを一部でみる、D₆反応や、DW的反応、3.上方突出部への反応、4.横にみる反応、普通児群ではあまり反応しないような場所を区切りとり、左右に一匹の動物などをみる反応、5.質疑段階でうまく答えられない為に、勝手なところで区切るdr反応、6.ふつう人間をみるところに、動物や鳥をみたり、四つ足の動物のところ、虫、鳥、蛙等をみる、等があげられる。

普通児群にみられて、精薄児群に見られ難い反応の仕方としては、1.人間の姿、顔。2.動きを伴った反応。3.結合反応。4.立体的にみる通景反応。5.個々ばらばらのものを一つのまとめたもの、集合体とみる反応。6.mF, CF, KF, cF, 等の半確定的形態の反応などである。

こうした両群に於ける反応のし方の違いをみると、精薄児群では、次のような特徴があげられる。1.インク像に対し、漠然とした知覚しか出来なくて、分化した知覚が出来ない、即ち、頭、胴体、手、足に適度のバランスをもってみる人間の姿や、髪、目、鼻、口、顔の輪郭をみる必要のある人間の顔などの反応は、精薄児に

Fig 1 精薄児群に特徴的な反応



として非常に難しい反応様式である。そして、四つ足の動物をみる場合でも、頭、胴体、手足の指摘が不十分で、漠然と見た動物を言う場合が多いし、四つ足の動物よりも、分化の少ない鳥や虫、魚等をみることが多い傾向がみられる。又、インク像の知覚と概念の産出との関連がうまくいかず、インク像の一部から概念を思いつき、後で、インク像の他の部分にこじつける為に、F-の反応やdrの奇妙な領域の反応をしたりし易い。2.通景反応、重なり合った複数の動物や人間の姿や、前からみた動物など、奥行きのある立体的な知覚が出来ない。これは、平面的、表面的にしかものごとをみることが出来ない精薄児の能力の欠如を示していると思う。3.全体としてみるべきところを部分でしかみないDo反応や、部分と部分を結合する反応の欠如や、個々ばらばらのものを一つの集合としてみる反応が欠如しているように、一部分にのみ気をとられ易く、全体を総合的、統合的に知覚する能力に欠ける。4.抽象的な内容の反応や、集合の反応（動物のお祭り、海の中等）が欠如しているのは、個々の具体的なもののみに気をとられて、抽象的な思考が出来ないことを示している。

さらに、反応内容を詳しくみていくと、動物反応の内容として、精薄児群で、特徴的なものとして、カブト虫、蟹、トンボ、蟬などであり、普通児群にも多いが精薄児群にも多いものとして、犬、熊、兎、蛙、鳥類、蝶、コーモリ等の動物があげられる。普通児群ではみられるが精薄児群に少ないものとしては、河童、鰐、猿、

豹、虎、猪、タツノオトシゴ、バイキンやプランクトン、幼虫などであり、猫、象、狐も精薄児群にはどちらかといえば少ないものである。又、人間の顔、悪魔の顔は精薄児群では少ないが、鬼の顔は比較的よく出現する。

こうした動物反応の内容の違いをみると、精薄児群では、おとなしい動物、家畜など身近かな動物が多いことや、童話に登場する動物、熊、兎、犬や鬼などがよくみられている。又、カブト虫、蟹、トンボ、蟬などの動物は、身近かな遊び道具や教材として、日常よく接しているし、彼等の興味の強いものだといえよう。それに対して、虎、豹、象、猿、鰐等の身近かでない動物はあまり出現しない。又、河童のような想像上の動物や、バイキン、プランクトンのような、直接目に見えないものは出現し難いのであろう。こうした内容の相違からみても、精薄児の生活経験の狭さや、興味の範囲の狭さが十分伺える。又、鳥や虫類に示される未熟なパーソナリティーや、猛獣のような直接的な攻撃性ではなくて、蟹のような潜在的な攻撃性が、精薄児の特色といえよう。

又、精薄児群では、木の反応が多く、VIII、IX、X図の色彩図版で特徴的である。依存的、受動的な傾向や、性役割の確立していない不安定さを示していると思う。又、解剖反応や雲の反応がよく見られるのは、漠然とした不安の存在を示していると思う。

一方、普通児群では、精薄児群と異なり、思春期的な内容の反応が多くみられている。例えば、船や飛行機などの乗り物は、冒険への欲求

や、生活領域の拡大、独立への欲求などを表わしていると思うし、火や火事や爆発の内容が多いのは、抑制出来ない激しい情動の存在や、それによる緊張の存在、又、環境からの独立の欲求を示していると思う。山の内容は多くみられるが、より強い存在としての父親像に対する劣等感を示しているだろうし、塔、城などの建物が多くみられるのは、劣等感をもちつゝも、現実には欲求を達成しようとする積極的な構えの存在を示している。一方、食べ物の内容は、精薄児群よりも多くみられ、依存性や、退行への欲求を示し、バイキンやプラクトン等の退行の意味をもつ内容が多くみられることから、退行への欲求は、普通児の方が大きいと思える。つまり、精薄児では、幼稚なレベルの行動が、周囲の人々からある程度承認されるのに対して、普通児では、承認され難いので、かえって退行への欲求が強いのかかもしれない。

その他、長坂の仮説的精神薄弱標識に当てはまる反応の型で、ごく少数ではあるが、これら精薄児群で出現したものがある。それらを、具体例をあげて示してみることにする。

イ) 一つの反応を、さらに部分的に単純に説明するもの。

A児 IV図 18" 1.蛙にみえる、2.足、3.顔 4.口 もうない。

ロ) 部分的反応をいくつかして、質問段階で一つの全体反応になるもの。

A児 IX図 6" 1.蟬の顔、2.目玉、3.羽・(全体で蟬の反応)

ハ) 知覚統合により一つの反応を出し、後はその反応の類似概念を述べる。

B児 IX図 12" 1.牛の顔、2.豚の顔、3.象の鼻、4.犬の顔、5.猫の鼻……

C児 II図 9" 1.花、2.サルビア、3.ケイトウ、4.アロエ、5.アサガオ……

ニ) 自由連想により、類似概念を述べていくうちに図版から完全に離れてしまう

C児 IV図 7" 1.山、2.川、3.動橋(以下地名)、4.室、5.西荒屋、6.内灘中学校前……

ホ) 自己中心的反応

D児 III図 15" 1.ゴリラの花子さん(Inq お腹の上にリボンをつけているので花子さん)

E児 III図 6" 1.赤いのは血があるし、腰がまがるし、このお尻出はった、僕のおばあちゃんの足のここが悪いし、〇〇病院入院して、今は退院して家でおる。

Table 2. 両群の各図版での反応内容の比較

A: 両群に同じように見られる反応内容
B': 普通児群に多く、精薄児群に少ない反応内容
B: 普通児群にのみ見られる反応内容
C': 精薄児群に多く、普通児群に少ない反応内容
C: 精薄児群にのみ見られる反応内容
()の中の数値は、普通児群:精薄児群の出現度数の比 ⊕は結合反応

〔I図〕

A: W又はdr. コーモリ、蝶、蛾、鳥等の羽のある動物(P)(46:20)
D₅ 犬の横顔(4:2)
W 葉(5:2)、飛行機(3:1)
B': D₁ 人間の姿(4:1)
W又はWS 動物の顔(狐、狼、牛、猫など)(32:6)
W又はWS 鬼、悪魔などの顔(9:3)
B: D₁ カブト虫(6:0)
W⊕ 三人の人が何かをしている(7:0)
W 花(あやめが多い)(4:0)
At 反応(骨、骨盤など)(3:0)
C': 突出部の反応(d₆、草、d₁、白菜など)(1:2)
C: 明らかに全体反応すべき所を一部だけで反応する(d₁、鳥の羽だけ、d₄、コーモリの顔だけ)(0:2)
図版の半分だけを蝶(0:1)

〔II図〕

A: W 動物の顔(9:4)、人間の顔(5:2)
D₂ 人の足(2:1)
B': W⊕又はD 二匹の動物(P)(27:4)
W又はD₁ 蝶(5:1)
W又はD At 反応(肺が多い)(6:1)
建物⊕(5:1)、ロケット(6:1)
地図(5:1)
B: W⊕二人の人が何かをしている(15:0)
D₁ 人間の顔(3:0)
D₂ 人間の顔(2:0)
火山と溶岩(3:0)
C': W 蟹(3:6)
植物(花、葉、球根)(1:4)

C: 漠然とした全体反応。縦に一匹の動物をみる。 D_1 を頭, D_3 を胴体, D_2 を足(鳥, ネズミ, 犬など)(0:10)

D_2 蟹のハサミだけ(0:2)

赤色部, 血だけの反応(普通児群では, 血は他と結合して見られる)(0:3)

[Ⅲ図]

A: W又はdr(逆向き), 虫, 蛙, 怪物など(D_3 が頭, D_5 が前足)(27:8)

D_1 蝶(P)(5:2)

D_2 タツノオトシゴ, 鳥(5:2)

W 動物の顔, 時に人間の顔(D_3 が口, D_1 が鼻)(10:5)

D_3 人間にみるところを, 動物, 河童, ガイコツ, 鳥などをみる(8:5)

B': W⊕人間が二人何かをしている(P)(49:6)

花瓶(9:1)

B: D_1 リボン, 蝶ネクタイ(P)(5:0)

D_2 人玉(10:0)

船(2:0), 雲(2:0), 景色(3:0)

C': 全体でみてもよい所を部分で反応する(D_3 , トンボの顔, D_5 , ロボットなど)(1:5)

C: 普通児では D_3 のところを D_6 で反応する(ガイコツ, 犬など)(0:2)

一つのまとまった領域を細部に区切る(D_2 の上半分をトンボ, D_3 の下部をカブト虫)(0:2)

[Ⅳ図]

A: W 木(23:8), ゴリラ(3:2)

W 羽のある動物(コーモリ, 蝶, 鳥など)(10:10)

W 動物の毛皮, 四つ足の動物(縦に一匹の動物を見る(7:6))

B': W 怪獣, 大男(40:5)

W 動物の顔(6:1)

花(4:1)

B: W 座っている動物, 前から見た動物(ライオン, 犬, マンモス)(7:0)

W 人間の下半身(2:0)

W⊕複数の動物が背中合わせ(3:0)

D_2 靴(2:0)

D_1 動物の顔(4:0)

雲(4:0), 洞窟, 岩(5:0), 森の中の建物や滝などの景色(7:0), 原爆, 噴火, 噴水などのmF反応(6:0)

C': Wでみる所をdrでみる(コーモリ, 蟹, 鳥など)(1:2)

D_2 動物や怪獣の足(人間の足の代り)(1:3)

C: W カブト虫(0:2), 蟹(0:1)

全体として反応すべきものをdで反応する(d_1 , d_2 怪獣の手, 馬の尾)(0:3)

[Ⅴ図]

A: W コーモリ, 蝶, 蛾, 鳥など羽のある動物(P)(90:43)

山(3:1)

B: D_1 人間(3:0)

W⊕複数の動物や人間の組み合わせ, 又は, 自然と動物の組み合わせ(草むらの中の兎など)(19:0)

W 一人の人間(正面像)(2:0)

d_1 , d_2 , d_3 動物の口, ハサミ(3:0) 噴水(3:0), 波(2:0), 装身具などの事物(5:0)

C: 上方突出部 d_3 に注目(ナマズのヒゲ, 花の芽, カブト虫の角)(0:3)

[Ⅵ図]

A: W 動物の毛皮(P)(猫, 虎など)(16:4)

D_2 動物の顔(4:3)

W又はdr 花, 木(10:4)

B: W 真正面向いた動物(猫, 狐)(3:0)

W 動物の顔(2:0)

W⊕結合反応(岩の上の鳥, 谷の上の人など)(4:0)

D_1 の半分 天狗の面(7:0)

弦楽器(12:0), 船(6:0), ピストル(3:0), 花瓶, うちわ, 飛行機(各, 2:0), 魚(5:0), 葉(4:0), 景色⊕(岩の上の燈台, 家が水に映っているなど)(9:0), 爆発, 噴火などのmF反応(6:0)

C': W 一匹の動物を縦にみる反応(12:13) 細部, 突出部への反応(dd, 猫のヒゲ, d_1 , 松の実, d_2 狐の足, 亀の顔)(1:6)

C: D_2 W トンボ(0:1)

[Ⅶ図]

A: W 兎二匹(16:4)

D_4 動物, 時に人間(15:6)

D_2 動物の顔(6:2)

D_1 蝶(3:3)

飾りもの(5:2), 雲(3:2), トンネル, 入口(3:1)

B': W⊕二人の人間が何かをしている(女, 子供, インデアンが多い)(25:2)

B: W(逆にして)一人の人間(4:0)

片方(逆にして)一人の人間(4:0)

W 動物の後足(2:0)

D_2 , D_3 人間, 悪魔の顔(9:0)

D_1 動物の顔(4:0)

ダム, 河(4:0), 地図(2:0)

C': WS 動物の顔, 鬼の顔(3:4)

C: D_3 兎の顔(普通児では人間の顔)(0:2)

dr(D_3 の上方突出部), 指, 角, 手(0:3)

漠然とした全体反応, 縦に一匹の動物を見る(トンビ, カブト虫, 蟹など)(0:4)

〔Ⅷ図〕

- A: W又はD 花(チューリップが多い)(12:7)
 W 動物の顔(3:2)
 D₃の半分 動物(虫, エビなど)(4:2)
 事物(4:3)
- B': W⊕又はD₁ 二匹の動物が何かをしている(P)
 (62:15)
 W又はD₃ 魚(7:2)
 飛行機(7:1), 木(4:1), 電気類(シャ
 デリヤなど)(4:1)
- B: W⊕複数の動物の組み合わせ(4:0)
 D₂の半分 動物の顔(牛)(3:0)
 D₂ 怪人 子供, 犬の顔(4:0)
 D₂ 蝶(3:0)
 D₃又はdr 山(10:0)
 カキ氷などの食物(4:0), 船, エッフェル塔
 (各2:0), 噴水, 噴火, 火事などのmF, CF反応
 (10:0)
- C': 漠然とした全体反応, 縦に一匹の動物を見る(ネ
 ズミ, 蟬など)(1:4)
 葉(1:2), 解剖(6:7)
- C: D₁の四つ足の動物の代わりに, 鳥, セミの幼虫,
 蛙等をみる(0:3)
 D₇の反応, 虎, 蝶, ブランコ等, 横にみる反応
 (0:3)
 雲(0:2)

〔Ⅸ図〕

- A: W又はdr 動物の顔, 人間, 鬼の顔(17:6)
 D₁ 豚の顔(3:1)
 D₁(横に回転して)立っている人間の姿(3:1)
 D₂ エビ, 蟹, 龍等の動物(7:3)
 D₆又はD₄ 人間(赤ちゃんなど), 動物(8:3)
 山(3:1), 滝, 海草(各2:1), 事物(7:
 5)
- B': 雲(8:1), 花(5:1)
- B: dr⊕複数の動物(2:0)
 D₁⊕(横に回転して)動物(他と結合)(4:0)
 D₂ タツノオトシゴ(7:0)
 DS 動物の顔(猿, 馬)(4:0)
 D₈ 人間(非現実)(2:0)
 火, 爆発, 噴水, 煙などのmF, CF, KF反応(38
 :0), 太陽, 湖, さんご礁, 岩, 橋, 城, 地図(各
 2:0), 船(5:0)
- C': D₇ 牛, 豚の鼻(1:2)
 漠然とした全体反応(テントウ虫, 象, 蟬)(1:
 3)
- C: 横にみる反応(D₁, 虎, D₆, 鳥)(0:2)
 上方突出部d₁+d₃ カモシカの角, カブト虫の角,
 蟹のヒゲ(0:3)
 木(0:3)

〔Ⅹ図〕

- A: D₁₆S又はSdr 人間の顔, 動物の顔(D₁₆が目,
 D₈, D₅が鼻や眉, D₁₂が口(17:6)
 D₁~D₁₅ 種々の動物(103:45)
 花(8:3), 海草(5:3), 内臓(2:1),
 事物(9:5)
- B': 崖, 谷, 岩(8:1), 火の玉(6:1)
- B: W 動物の集合, 海の中(35:0)
 D₉ 人間(5:0)
 dr 前からみた人間(2:0)
 D₁ 動物+動物, 人間+動物の組み合わせ(馬に
 乗った人など)(5:0)
 抽象反応(天国と地獄など)(4:0), サンゴ礁
 (2:0), 鐘, 鈴(3:0)
- C': 漠然とした全体反応(龍, 蛾, 蟹, 飛行機など)
 (3:6)
 花火(2:3)
- C: 全体とみるべき所をDだけで反応する(D₆, 人間
 の目, D₃, 蛾のしっぽ等)(0:4)横にみる反応(円
 盤, 蛍光灯)(0:3), 木, 草(0:3), 橋, 鋏,
 飛行機(各2:0)

参 考 文 献

1. Halpern F: A clinical approach to children's Rorschachs, Grune & Stratton 1953 (富田正利, 松本忠久訳, 児童臨床のためのロールシャッハ診断, 実務教育出版)
2. 伊東恵子: 精神遅滞児のパーソナリティーに関する一考察, ロールシャッハ研究Ⅺ, P159-180, 1969
3. 片口安史: 心理診断法詳説, 牧書店, 1968
4. Klopfer B. et al.: Development in the Rorschach Technique I, World Book Co 1954 (京都ロールシャッハ研究会訳, ロールシャッハ法の発達I)
5. Klopfer B. & Davidson H. H.: The Rorschach Technique ... An Introductory Manual, Harcourt & Brace & World 1962 (河合隼雄訳, ロールシャッハテクニック入門, ダイアモンド社)
6. Rorschach H: Psychodiagnostik, Hans Huber 1921 (東京ロールシャッハ研究会訳, 精神診断学, 牧書店)
7. Sarason S.: Psychological problems in mental deficiency, Harper & Brothers 1953
8. Sloan W.: Mental deficiency as a symptom of personality disturbance, Amer J Ment Defic, 52, P31-36 1947
9. 高橋雅春: ロールシャッハ解釈法, 牧書店, 1964